桜色の心。

万里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色の心。

【Nコード】

N5586K

【作者名】

万里

【あらすじ】

桜を見たことがないユウちゃん。

タツくんは、桜を見せてあげて約束した。

ユウちゃんは、桜を見たことがなかった。ずっと白い部屋にいる。白いベッドの上で、いつもパジャマで寝ている。

タツくんには、ユウちゃんの腕についている細いストローが何なのかわからない。ストローの先につながってるのは、水なのかジュースなのか、おいしいのかもわからない。

「ユウちゃんは病気なの」
ってママは言う。

「病気って何、ママ」

それはね、とつてもとつても苦しいことだよって教えてくれた。

タツくんはそうは思わない。だってユウちゃんは、苦しそうだったことなんてないんだもん。

タツくんがユウちゃんとお絵かきをしているときだった。ユウちゃんがタツくんの絵を見て、不思議そうに言った。

「これは何？」

ユウちゃんが指差したのは、ピンク色で描かれたお花だった。

「これは、桜だよ」

「桜ってなあに？」

ユウちゃんが首をかしげる。

「桜ってのは、春になると木に咲くピンク色の花のことだよ」

タツくんが説明すると、ユウちゃんは目を輝かせて言った。

「ユウちゃん、桜見てみたいなあ！」

ニコニコと笑う。

ユウちゃんは、桜を見たことがない。ずっと病院にいるからだ。病院にも桜があればいいのに、あるのは白色だけでピンクはない。

「じゃあ、僕が見せてあげるよ！」

「やったー！嬉しい！」

タツくんは、ユウちゃんに約束した。ユウちゃんに桜を見せてあげよう。

病院を出ると、タツくんは桜の木があるところまで、走っていった。

桜が咲いている木を見つけた。タツくんは桜の木の近くに行く。腕を木に回すと、一生懸命引っ張った。

「おい、ポーズ。何やってるんだ？」

突然、後ろからおじさんに声をかけられた。

「ユウちゃんに、桜の木を見せるの！」

タツくんは無邪気に答えた。

「ユウちゃんに見せるのか。なんでだ」

「約束したから」

「そっか。優しいんだな。でも、これをもってくるのは無理だぞ」おじさんがそう言うと、タツくんはがっかりした。それを見たおじさんが、ちよつと待ってる、って言ってどこかに行ってしまった。

ちよつとして戻ってきたおじさんは、紙とクレヨンと封筒を持ってきた。

「ポーズ、絵を描くのは得意か？」

「うん！」

「じゃあ、この紙に桜の木の絵を描いてみて」

タツくんは、せっせと桜の木の絵を描いた。おじさんはずっと見ていた。

少しして、桜の木の絵が完成した。

「できたよ！」

「よし。次は桜の花びらを集めて」

タツくんとおじさんは桜の花びらを集めた。手にいっぱい集めた。

「集まったら、貸してごらん」

おじさんに花びらを渡すと、持ってきていた封筒に、花びらと桜の

木の絵を入れた。

「これを、ユウちゃんに渡しな」

タツくんは、おじさんから封筒を貰う。

「わー、桜のおじさん、ありがとうー！」

タツくんはとつても嬉しかった。おじさんがタツくんの頭をなでる。

ユウちゃんのいる病院まで、タツくんは走っていく。振り向くと、桜の木の下にまだおじさんがいた。タツくんが手をふると、手を振り替えてくれた。

タツくんは、封筒を大事に大事に抱えて走った。

ユウちゃんのいる白い部屋のドアが近づく。思いつきりドアを開けると、いつものようにベッドの上にユウちゃんがいた。

「タツくん、桜は？」

「持ってきたよ！」

そう言つて、封筒を差し出す。ユウちゃんはドキドキしながら封筒を開けた。

「わぁ！」

桜の花びらが、白い布団をピンク色に変える。桜の木の絵を下に引くと、そこには本当に桜があるようだった。

「すごい！これが桜なんだ！ユウちゃん初めて見たよ！」

嬉しそうにユウちゃんが笑った。それを見て、タツくんもすごく嬉しかった。

「よかった。ユウちゃんが喜んでくれて、僕も嬉しい！約束守れてよかった！」

ユウちゃんが桜の花びらを上に投げた。ふわりと舞って、花びら一枚タツくんの頭に乗った。

「タツくんの頭に乗ったー！」

ユウちゃんが笑う。タツくんも笑う。

「ユウちゃん桜好き！」

白かっただけの部屋に、ピンク色が注ぎ込まれる。冷たかった空

気が、タツくんとユウちゃんの笑顔で温かい空気になる。
その白かった部屋に、ふたつの笑い声はずっと響いてた。

あれから何度目の春だろうか。また桜の季節だ。

今でも舞い散る花びらの中に、桜のおじさんがいる。そこに、
一つの影が近づく。

「よお、ポーズ」

背の高い少年に、桜のおじさんは紙と絵の具と封筒を渡した。

「約束か」

「はい。桜を見せてあげるんです」

少年がもらった紙の上に、桜の木が植えつけられる。

「優しいなあ」

「ううん。そんなことないです。桜のおじさんのおかげです」

「そんなことはねえよ」

少年と桜のおじさんは、桜の花びらを集めた。ピンクの花びらが、
少年の腕の中にあふれる。

「桜のおじさん、この絵持ってくださいませんか？」

桜の木の絵を差し出す。

「いいよ」

「ありがとうございます」

上を見上げると、青い空が広がっている。

「その絵、空に向けてください」

「おう」

桜のおじさんは、絵を空に高く向けた。

少年の腕から、ピンク色が空に広がる。

「ユウちゃん・・・」

桜の花びらを、風が巻き上げる。空へ空へ、高く舞っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5586k/>

桜色の心。

2010年10月27日23時03分発行